

# 風話鈴香

発行所  
 尼崎市小中島 1-1-18  
 社会福祉法人  
 阪神共同福祉会 園田苑  
 TEL06-6493-3731  
 発行責任者  
 理事長 中村 大蔵

## 私達の目指すもの

- 一、地域に開かれた施設
- 二、入居者、家族、施設、地域のみんなで作る福祉を！
- 三、老人と共に生きがいを見い出す生活を

社会福祉法人 阪神共同福祉会 園田苑

園田苑には今年、百歳の誕生日を迎えた入居者が3名暮らしておられます。9月28日、敬老の日と百寿のお祝いをしました。今年は、思うように外出もできず楽しみも少ない中で、皆で美味しいものを食べて、元気に過ごしましようとの願いを込めて、園田苑では初めてのイベントを開催しました。

### 沖縄から26キロのマグロが来た！

ことの始まりは、行事が中止になり顔合わせの機会もなくなり、家族会と職員とでささやかなお茶会をしようと、話し合いをしていました。しかし、コロナ禍でなかなか実現出来ず、どうしようかと思案していたところでした。

同じ頃、マグロが大好きな入居者が園田の回転寿司店で行われている、マグロ解体ショーを見に行きたいと言われました。しかし、このコロナ禍の状況では外出も難しく・・・

だったら、マグロ解体ショーを苑でしてもらおうと思いましたが、べらぼうな金額で半ば諦めていたのです。私の思いを、秋山栄養士に話をしたところ、直ぐに調べてくれて、翌日には「苑で解体ショーをすることは可能ですよ！」と言ってくれました！！

「マグロの大きさは、中の小ぐらいですけれど」と言われましたが、善は急げと私の速断で「お願いします」と言ってしまうました。

### 好きなものは喉詰めない！

当日、厨房職員の浜路さんがマグロを丁寧に解体してくださり、皆「すごいな」と見入っておりました。入居者の皆さんが、中盤から早く食べたという思いが強くなり「まだかな」という雰囲気が出されてきました。

いざ美食！の時は皆さん凄く良い笑顔で、大変喜ばれていました。(やっとならぶられると思っていたことは内緒です)



歯がない方でも、好きな物を食べる時は喉詰めないのだと改めて思いました。

今回は、花見も夏祭りもなくなくなり、楽しみが減った入居者に「おいしいものを食べてもらいたい」という家族会・入居者ご家族からのご好意で実現することが出来ました。大変有難く思っております。

まだまだ大変な状況が続きますが、どうかこれからもご協力をお願い致します。(生活相談員 山根 靖恵)

### 感染症に恐れず

#### チャレンジ継続

9月21日敬老の日。園田苑の事務所前フロアでは、ご家族と楽しく話をされている入居者の笑顔が印象的でした。

感染症予防を行い、体調確認の上、少人数で短時間にはなりますが、対面での面会を場所限定し、実施しています。

通院以外の外出、外食は感染症予防の観点で中止しています。

何かと制約の多い毎日ですが、皆様のご支援、ご協力を賜り、10月12日に園田苑は創立32周年を迎えることができました。

行事の見直しや家族、ボランティア、地域の皆様の出入りを中止し、今まで当たり前になっていたことがほとんど無くなり「無いのが日常」になっています。

感染症対策を行い、新しいことを取り入れる柔軟な思考で、生活の楽しみが増えるよう前向きに日々試行錯誤してまいります。

32年の歴史や人間関係を大切に、「コロナ禍でもチャレンジし続ける園田苑」をこれからもよろしくお願いいたします。

(施設長 河合 恵子)

### 再び皆さんが訪れたいハウスであり続ける



大人数でのお祝いの会は困難との判断で、楽しみにしていた22周年記念の会が中止となりました。

9月26日の夕刻に入居者、理事長、施設長、職員で少し豪華な夕食会を開きました。

少し寂しい記念日でしたが、おいしい食事やお酒も楽しんでいました。

今年一年、皆さんと集まることがほとんど中止となってしまいました。

来年こそは、すべての行事が元気でできることを願っています。(グループハウス主任 谷井利彦)

### 「限界公営住宅」からの脱皮

理事長 中村大蔵

今、尼崎で画期的なことが起ころうとしている。

公営住宅に従来の枠組みを超えて、新しい入居者を迎え入れたことである。入居者と言うより公営住宅のコミュニティ活性化に向けた新しいパートナーの募集といったほうがふさわしいかもしれない。

久々知にある阪神淡路大震災後に建設された災害復興市営住宅が、そのモデルとなりそうである。

この市営住宅は二つの部分から成り立っている。コレクティブ棟と一般住宅棟である。この二棟の入居者が相互の交流を図り、さらには周辺地域住民も巻き込んで、コミュニティづくりに取り組もうとする企画である。

三年前、コレクティブ棟で起きた一人暮らし老人の焼死事件をキッカケに、本来のコレクティブにふさわしい、多世代が集う集合住宅化をも意図するものである。

住まいは地域福祉の原点であるといわれる。だが、他者との交流が図られず、それぞれの住宅に閉じ込められた現状の突破口を、個人個人の努力だけに待つのではなく、それを促進させる仕掛けを作ろうというものである。

ある意味、壮大な実験かもしれないが、限界集落ならぬ「限界公営住宅」なる語句が、ささやかれる時代である。

久々知市住に若い単身学生が住み、あるいは開き、それを住民が支えることに繋がれば楽しいことになりそうである。今、新しい地域づくりが始まろうとしている。